

歌道秘藏録

皇
815.7
Ka

60700

清はのてよむ口傳多し、初詠のてよむ、譬ハ天明と明石
の浦此朝夢に清隠り舟と。そ思ふの奇し舟とよ
志候なり。いいてよむあり、てにこれ事、舟と清く此
より

才一巻十三箇條口傳可秘

一 一を縁てよむの事、読とよむらんよむや、うらむかじあまな
あそつゆいふいふいそいそいひいれい道是
乃云ふつとていを縁て傳ねよとていひ

古今を
日意
年と縁てこれ鏡となる水に波つるよ、量といふ事
大空に雲とていふ物にまよふ流るらん

口傳録

いづくのよの夜とていひ
かくのよくめゆれ肉よのくもほりてとて、後但つとて
あそつゆいふ別の事なり

一 二治定してよむ事、思ん思ん初ん思んかん
いひなり

一 三かき入めてよむ事、是る假名のかへつるなり、思
よふあひあり、思て思ふのふにてよむ、譬は

千載云
春日山麓の本代名と月あれいよきひりり、かを神ちん
乃をい入野るよ、思つたす、思のこみよ、思て思ん

一 四のてよむ事、思

一 又かゝ類の事

一 六とり穀ある事

一 七度とみくわしこと類しことりてきとてふふ縁
字是ハ者一風よて作る

一 八らー

一 九あゝぬ

一 十ぬゝしとさす

一 十一まーとさす

一 十二しとてよそ

右みテ條いつとらんのくへなる

一 十三か、ハ候名と略しうらんときりけめとて

ぬき ぬかたり 口傳

又大事 口傳

そとこれにひきやといふやせんそをみ川邊成り

そと

拾遺帖

水乃面は照月かことかきききハと書そ 秋の夜中へる

こそれ

古くそ 枝よりとあふふ教あし花あれはさくも水のあはれ

たひひきやとい

子規

たひひきやあらのそりてかたつそ下敷も同一まろ縁

右に傳一子相傳之書也。不丁有相傳傳借于他者也。

妙小源代

龍寺

龍寺源惠
是今令名也

源惠

源政直

元龜元年 庚午 菊月 廿五日

方二卷ろと云事

一 けろの字はあきまはしあり、五音方三の音よてまへ
より、方三の音とい、ウリスツヌフムユルウに傳へし、けろと云ふ

花をく 海を神よ おい る 波をし 川 をわ い と をう つ い を
こ ぬ 物 を お ふ 人 と を た の む。

かくのこくわりの(よつ)めよ

一 上件のおよ し き さ ら 糸 し は た め け と ま り る 何 り

古今集
衣日と夕言よなる所そく 人 い い い 残

古今集
水のうへようる 舟の ま あ ら い な れ と ま り と い 海 ゆ ゆ

な を 見 れ 月 と を ア リ は 松 を を 友 と わ ひ 川 の ま を か ん
吟とう お り く と む な し

一 と め り と わ ら い ゆ ぬ る の 字 あり 是 と 下 知 の ろ と つ ふ

人 か と う め ろ か く が せ り け と い あり

一 そとやとのへはく通ひ侍りよとくを

武藏守 彦もあつと海客よまはるる事也
そとのへはくあり 武藏守よまはるる事也
つめいふあつと 吟味よまはるる事也

まはるる 彦もあつと海客よまはるる事也

一 そとのへはく通ひ侍りよとくを

折つ 彦もあつと海客よまはるる事也
折つ彦もあつと海客よまはるる事也

是こそあつと 風のふく雪のふく風を
つめい侍りのへはく通ひ侍りよとくを

そある彦もあつと海客よまはるる事也

まはるる 彦もあつと海客よまはるる事也

山 彦もあつと海客よまはるる事也

是おれあつと海客よまはるる事也

一 むら 彦もあつと海客よまはるる事也

むら 彦もあつと海客よまはるる事也

是おれあつと海客よまはるる事也

一 むら 彦もあつと海客よまはるる事也

そある彦もあつと海客よまはるる事也

以上十四ヶ條奥書同前

亦又巻かの字れ事 六ヶ條しに傳

一 凡穀ひのつぎれしーううひのやれ字同ー

一 家と古今意しるてふととーしん海事ーしー

心くすれりれぬとーかーひらるー記おと今とん

夕月夜附日まや夜の果れ又漸くもあるりくしれ

糸のすいんくあるものよたいり後のうー漸くたま

よやり
古今意 ほみとり糸るさけくい白雲とまじぬげり糸の仰り

一 三くとえてふし

にりふとらまれ山さようちひれてそこまやぬ松子して

有明の月とぬる此浦風は波をりくそまをみし

けふりに火しるまのーのてにしとてふてはてにしむひかり此字よを休めてたくとしつるま

糸ふつは用事もあり 能く味をひけるを

心と六ヶ條奥書如前

一 井六巻かむとえてふし

一 川いいとえてよん通作り
くふのこしと名をたぬぬふもしとやを死のけり

明石深多き人の神とんす後月とやととの

一 つはとえてふしむの字かやとめてよにいむ事難か

いふ人若かの中よす處に世のうき事れやいふ人
 あはひまてらに神のふりかひまてらあひまてら
 うとしいくはよ申事もありやのまじりていふ
 やと申てふまよ申り

郭公と郭のあさふあ死つかに思きくらんあさわをん
 以上ニケ條奥書如也

中七一とてえておし

一 凡向のあふととてに驚くつひ御事事なり
拾遺
 けさのあふまみる物あり郭のあふとていふあふ
古今表傳
 終よゆたるといふあふとていふあふとていふあふ

是ふかふとかふくともするともあり

一 うとていふと云御事あり命よ

物をもて只んこのあふとにぬる事ハぬる秋の杖を

一 かへ一のあ

新なるハ十うち人のあつてふておあはしてふあ
 是らあはしてふあをいふてふあといふていふていふ

一 物とて云事 是といひあをておとて

白むあはいと人のあふ一時あをて消えま物
 らかりあはてふあをのあふもあはてあはてあはて

一 物といひくといはれり 命り

一 もの字とて回心のてしとていり是も一とて多敷きなり

秋の夜も月のうつくしき夜も風もよそよそとほろほろ

一 やの字とあまの者おの器にふり及回心のやとて極多あり

月やあなぬきや青れきあなぬ影方ひつゝとて秋あり

是も満句といふんぞと

あつゝや花津の葉りたつと枝やきくかゝぬ影ありん

是木のふらひらいととてゆへし 吟味よるなり

一 回答の初一首の内は満句ふとく一

又月清むとて系乃香をいひ昔れ人の袖乃香をいふ

すれも回子の浦波とぬ月かあまのまゝとてさるりかた

一 回字の事

心の字の物もつがさるるくくしと物いひまよるん

おのりも神よりあなぬきあひりん秋風吹くとも物とい

是もよほきつが侍りへさききとてい中く何れん

なり凡ゆるの事いふとてゆりつとこれぬ事ありん

以上奥書也

卷十一

一 外といふてよとて秋ひか

あつゝもあなぬきあなぬ影方ひつゝとて秋あり

一 てふそのなり

うしや あり事あきて多たといりそむる不ゆへ

續古今

去いして 庭をとりけし物ふあきつめて月いつるに後

郭云 西ふの里にさるれぬ弁を垣の五月雨をさる

後隆集

我せこよ 兄を人とさる 梅の花をれもみよと雪海に

白氏詩 琴詩酒友皆抛我 雪月花時最憶君

け時と云字なきはとまりといり口傳とつけたり

尾上より本のもよきあそと雲のうら見れつるあそ

かみのうらひのこし ちりきらゆゆと人ちり

以上奥書ゆへ

才十三卷

一 おくといふてふその事

と かくつとこころ 人むくし 花をさるる危の徳絶なき

ハ 秋津物かきて波にあつたむくむく とうつる古和とのたふ

に 物とふつたれさし此列はそとふ後のくれあき

つ どのくささ とうかにく 柳のえさふさふあけ

と 心屋に燈への海を恨むて ちのまうたあつと

の 入ねの障れひさのふけ

と 嵐とく花のゆふ初のかく

一 口傳る事才このまじウリスツ又フムユルウとなきて の

系と入く用たり 他口傳あり 切紙あり

廣く川をふりて此を岡みく

一 一にてとてよはしはふくと同し

今もも残り一月と友ありて 幾時なれぬか

年月ろきのかさりたる地く 足馴一友のあはれ

仲のいらぬうさふりり 却のふり月かきく

一 兄也と云はし五音分三のまじウクスツヌムエルら

よてあふふとこまへーにふいふ

種後撰萬葉

の相根返と家あえれし侍巨馬や沖のあはれ波のうら

けあよにわしととたててしめたり

以上 奥書 ぬす 口傳可秘

種くすこれいふ お毛ふのあしと お傳へ 惟必く一子あり
くろ古抄より ありあり 修能あり千金を寄る 誠心之
儀不可詳之 可秘く ぬす

元和八壬戌年八月十三日



右在冊速水先生以本書寫之予不可
他見者也

元文三年仲夏中旬

以藤原親岑



